

看護研究における テキストマイニング（Ⅰ）

医療という領域の中で、看護ほど自然言語を用いて活動を記述する領域はないだろう。自然言語とは、人間が日常のコミュニケーションで用いる、文化的背景とともに発展してきた言語体系である。しかし自然言語を用いて記述をすると、どれほど努力しても記述に曖昧さが残ってしまう。ヴィトゲンシュタインが喝破したように、曖昧さは自然言語の特質である。

なぜ分析にまで自然言語が使われ続けるのだろうか。看護で扱う対象は、複雑だ。狭義の医療での呼吸音は、周波数、波形といった生理学的指標で表しうるかもしれない。ところが看護における呼吸音は、音(聴覚)、胸郭の動き(視覚、触覚)、肌の色の微妙な変化(視覚、温度覚)、口臭(嗅覚)からなる共感的なゲシュタルトである。だからベテラン看護師が語る臨床は、メタフォリカル(比喩的)にしか表象できないことも多い。臨床の看護師たちは、日々の習練を通じてこの言葉の術を身につけ、世代を越えて蓄積してきた。言語の曖昧さ、多義性は、現象の微妙な変化を語る豊かさでもある。

看護学では、質的研究法の名のもとに、人類学や社会学などで用いられた方法が「使われ」ている。括弧つきで述べたのにはわけがある。そのどれもが習得に厳しい習練を伴い、膨大な知識の集積があって初めて使える方法ばかりで、方法を構築した学問領域の専門家たちの中には、疑問符つきで斜めに見ている者もいる。量的研究法でも、数理的な処理を行なう前のデータ分布の吟味が行なわれないこともある。これだと、複雑で緻密な臨床看護データを処理できなくなる。

どの専門領域においても、高度化し、他職種との協働が潮流となっている今日、看護領域においても、境界を自由に行き来できる通路を開き、概念を共有しつつ他職種と語る場を構築したい。他職種だけではなく、世代間のコミュニケーションギャップも生じはじめている。若い看護師にとって、ベテラン看護師が語るゲ

シュタルトの世界の理解は困難になりつつあることも事実としてある。

そのような現在、どれほどたいへんでも、互いに了解可能なように手順を可視化、言語化する必要に迫られているといえるだろう。テキストマイニングは、複雑に絡み合った臨床の糸を解きほぐす取り組みである。「たいした結果は出ていないではないか」という批判もあろう。確かにそれはその通りである。一夜で臨床の知を語れるほどに学を成熟させることはできない。しかし、着実に糸口は見つかりつつある。テキストマイニングという再現可能な方法を用いて、証拠(evidence)を示しつつ、自分たちの智を伝えはじめている看護職者たちが増えてきている。本特集では、そのことを示していきたい。テキストマイニングの概要をはじめ、看護研究においてテキストマイニングがどう活用できるのか、そしてそれは研究の場、臨床の場をどのように変革する可能性をもっているのか、実践例から本号と次号の2号にわたって考えていく。

テキストマイニングが、看護研究の発展に寄与できれば幸いである。

企画：服部兼敏(神戸市看護大学教授)